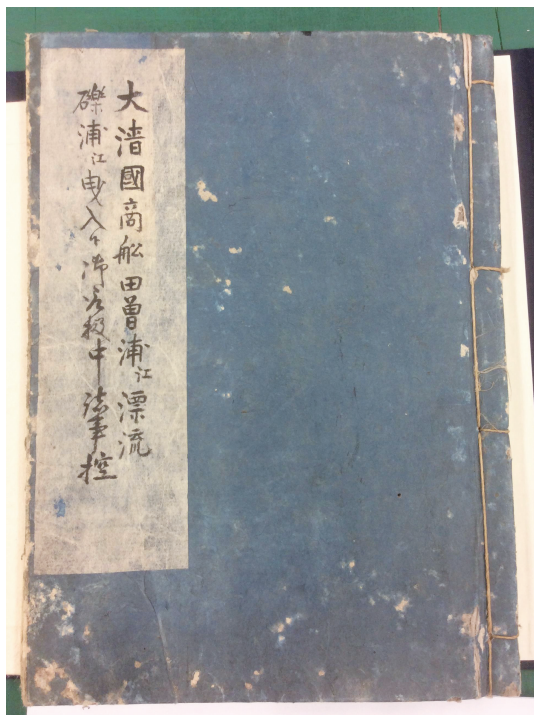


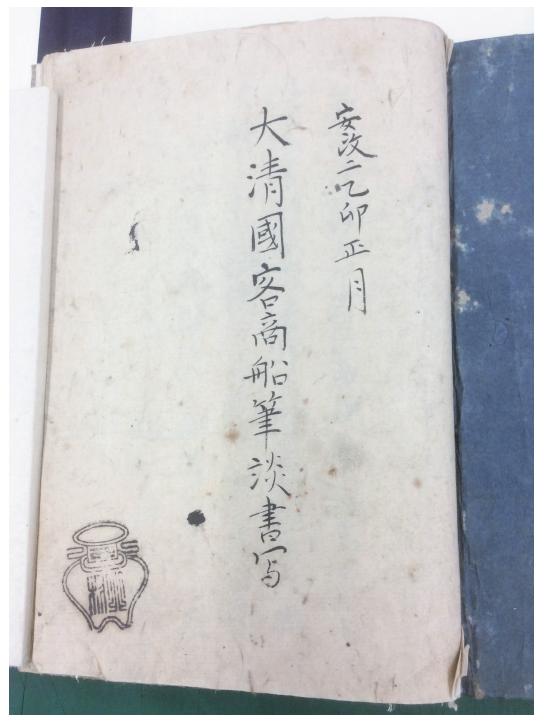
＜新収資料紹介＞

安政二年正月 伊勢^{た そうら}田曾浦 清国商船漂着記録

高木 理久夫（高田早苗記念研究図書館担当課）



（写真1）第1冊表紙



（写真2）第2冊表紙

○通州商船三甲二十一号の遭難

咸豊4年（1854）5月、前年分の貢租（年貢米）1,600石の運送を託された1隻の商船が、浙江省嘉興府平湖県（現・浙江省嘉興市平湖市。長江河口、杭州湾に面している）から天津をめざして出向した¹⁾。この通州（現・江蘇省南通市区）の彭恒福が所有する商船「三甲二十一号」は、同年8月には無事、官の役目を終えた²⁾。

秋が深まりゆく中、華北の大豆、小豆等穀類を積荷として帰路についた三甲二十一号は、11月17日、山東半島沖を過ぎたところで、数日にわたり暴風に襲われ、12月10日になってやっと風はおさまった。

この嵐の中、航海士の彭錦初（51歳）が死亡、残り19名の船乗りたちは、西風に吹かれるままに伊勢の田曾浦（たそうら。当時は紀州藩の領地。現・三重県南勢町）沖に漂着、それは年が明けた咸豊5年（1855）、安政2年正月元日のことであった。

○漂着船との遭遇

漂着した異国船への地元の対応はすばやく、翌日には田曾村

の役人が接触³⁾、その記録をもとに9日付で鳥羽城主稲垣摂津守が、10日付で紀州藩が江戸の老中に第一報を届け出た⁴⁾。

すぐに水、食料、薪が届けられ、その後、漂着船は礫浦（さざらうら。現・三重県南勢町）に曳き入れられ、地元での取り調べ（原文「取扱い」）がおこなわれた。その時の記録が、今回、中央図書館に迎え入れられた当資料である。

江戸末期の写本であり、大きさは縦23.5cm、横17cmで、2冊が合本されている。本稿ではこの資料を「安政二年正月伊勢田曾浦清国商船漂着記録」と題した。

第1冊（全64丁）の表紙題箋には、「大清国商船田曾浦へ漂流 礫浦へ曳入り御取扱中諸事控」（写真1）とあり、表紙をめくると第1丁の前に、通常の料紙4分の1ほどの短冊（表題紙とする）が綴じられており、「安政二年卯正月朔日 大清国商船田曾浦へ漂流礫浦へ曳入れ御取扱中郷組諸事控」と記されている。記録内容は、船員たちに対する取り調べや応対に関する報告の控え、船員との筆談記録、船内の様子の記録や漂着船の外観、曳き入れ航路の図等である。

第2冊（全15丁）の表紙には、「安政二乙卯正月 大清国

客商船筆談書写」(写真2)と記されている。この冊子には第1冊の記録から中国人たちとの筆談部分が抜き書きされ、まとめられている。

○船乗りたちの言葉

筆談記録から、生存者19名の年齢構成は20歳代7名、30歳代9名、40歳代2名、50歳代1名、皆を代表して筆談にあたった顧漢臣は、最も若い21歳であった。

彭錦初の遺体は戸棚に置かれ、船内は悪臭に満ちていた。そのような状況の中、まず最初に彼らが布きれに書いて差し出した「言葉」は、

- ・大清国の彭恒福の船で、11月17日に山東沖から大風に吹き流されてきた。
- ・ここはどこかの国か。
- ・水、米、薪がほしい。

ということであった。すぐに水40桶、精米2石、薪150束が船内に届けられた。その後、生存者の姓名と年齢が書き出され大風に吹き流されてきた状況が詳しく告げられた。

次に、日本の役人は、このような問いかけをした(第1冊記載「漂民応接」より)。「我」は日本側、「彼」は中国側)。

我 汝等非崇奉耶蘇教者乎

—おまえたちはキリスト教徒か。

彼 難解不能答

—難しくて答えられない。

我 天上聖母之外更有所敬乎

—天上聖母のほかに敬っているものはあるか。

彼 吾船敬天上聖母。第一人家、第一敬天地父母

—船では天上聖母を敬う。家では天地父母を敬う。

日本の役人が最も知りたかったキリスト教信仰の有無の問いかけにおいて、「耶蘇教」という文字では清国の船乗りたちには意味が通じなかったようである。2番めの問いにある「天上聖母」とは天妃、天后とも言い、航海の女神、媽祖の別称である⁵⁾。「第一人家～」の意味がとりにくいが、船上での信仰と普段の生活のことを対比しての言葉と思われる。

さらに正月15日、「十五夜筆談」と記された下記のような対話記録がある。

我 燈燃浮水者何故

—燈火を水に浮かべているのはなぜか。

彼 今日吾国人家放河燈而消災也

—今日はわが国では燈火を河に放ち災いをなくすのだ。

旧正月15日は元宵節であり、中国では灯籠や提灯に火を灯して宵を送る。その風習をもの珍しく見つめる日本人のまなざ

しが、この短い筆談に感じられる。このように、当時の筆談記録がそのままのかたちで記されていることは、当資料の資料価値を高めていると言えるだろう。

○時代の荒波へ

正月17日におこなわれた乗組員との筆談において、紀州の塩津浦(しおつうら。現・和歌山県海南市下津町)まで、小舟で三甲二十一号を曳航すること、そこで長崎まで送りどける命令が下されるまで待つことが伝えられた。

その後、漂着船は、紀州藩の護送により下関を経由して長崎に送られ、同年5月には中国に向け帰航したという⁶⁾。

安政2年(1855)から3年までの間、長崎奉行がまとめた中国からの漂着船に関する記録は5件、残されている⁷⁾。晩秋から冬にかけて東シナ海に吹き荒れる暴風に襲われ、海に飲み込まれた商船は、おそらくかなりの数にのぼったことだろう。

当時の東アジアの情勢をかえりみれば、中国では太平天国の乱(1851-1864)の最中であり、咸豊6年(1856)にはアロー戦争(1856-1860)が勃発する。日本では嘉永6年(1853)、ペリーが浦賀に来航し、翌年には日米和親条約が締結されている。大海原の暴風下、生きのびた船乗りたちは、その後、時代の荒波をつつがなく、乗り越えることができたであろうか。

なお、和歌山県立図書館にも、「漂民応接書」が残されており、その翻刻が松浦章氏の論文に掲載されている⁸⁾。当館の資料の記録内容と、記述が異なる箇所が散見され、特に「執照」(年貢米を輸送する証明書)、「完照」(年貢米を無事輸送した証明書)の記載を、当館資料は欠く。今後、和歌山の資料とのより詳細な比較検証が期待される。

【参考資料】

- ①松浦 章「清代沿海商船の紀州漂着について」(関西大学東西学術研究所紀要20)1987
- ②松浦 章編著『安政二・三年漂流小唐船資料—江戸時代漂着唐船資料集八一』(関西大学東西学術研究所資料集刊十三一八)関西大学出版部 2008
- ③山崎英二編著『志摩国近世漁村資料集—浜島町を中心として—』(三重県郷土資料叢書第六集)三重県郷土資料刊行会 1967

【註】

- 1) 参考資料①58頁掲載「執照」翻刻文による。
- 2) 参考資料①58頁掲載「完照(図5)」による。
- 3) 参考資料③15頁上段、「翌二日田曾村の役人異国船の近傍に到り」。
- 4) 参考資料②367頁収載、『大日本古文書 幕末外国関係文書之九』より。
- 5) 『中日大辞典』増訂第二版1818頁 大修館書店1987。
- 6) 参考資料②534頁。
- 7) 参考資料②532頁。
- 8) 参考資料①52～59頁。